

## 平成27年8月の大阪森林便り



### 国産住宅用木材、下げ一服 減産などで

国産柱用の集成材の集成管柱は5月から横ばい、針葉樹合板も6月中旬から横ばいです。

メーカーの減産の影響が出てきました。集成材メーカーは2割程度の減産を継続。針葉樹合板も減産を強化しており、1割程度だった減産幅を7月から2割にしたメーカーもあります。

(2015年7月3日 日本経済新聞記事から抜粋)



### 屋敷林のある家

屋敷林に囲まれた農家が美しい平野に点在します。

屋敷林は風雪や日差しから家屋を守り、人々に恵みをもたらします。農家は代々、この林を大切に育て、ともに暮らしてきました。屋敷林は10m以上の高木から中低木まで幅広く密生します。高木は風に強い杉やあすなろ、欒。中低木は柿やカエデ、ツバキなど。

落ち葉や小枝は燃料として、炊事や風呂焚き、囲炉裏などに使いました。

家を普請する際、木を伐って材料に充てました。硬い欒は柱や梁、あすなろは戸や棧、杉は外壁という具合。昔は娘が生まれたら桐を植える風習がありました。昔の農家は3世代同居が当たり前。部屋数が10以上あり、家族が増えれば増築。戸を取り外せば大広間。

燃料は電気やガスに置き換わり、今は落ち葉の処理に困る始末。手入れの大変さから伐採する家も増えたといえます。

気温を下げる葉の蒸散作用は、年々厳しさを増す夏の暑さを和らげます。

(2015年7月9日 日本経済新聞記事から抜粋)





## 針葉樹合板、1年半ぶり上昇 — 減産で供給減

針葉樹合板の価格が1年半ぶりに上昇しました。6月と比べて6%高くなっています。

大手主要メーカーが2～3割減産を実施し、大手住宅メーカーも受注回復を見込んで調達を増やしたため、需給に引き締め感が出ています。

合板需要は6月の出荷量が前年同月と比べて39%増えました。

(2015年7月28日 日本経済新聞記事から抜粋)



## 今月の木の話

## 樹木は生きているのか

樹木の「樹幹」は、かなりの部分が死んでいます。

葉は光合成という植物にとって最も重要な機能を司る器官ですから、当然生きています。

「根」も根毛や細根のように、土壌中から水と無機養分を吸収しなければならない部分は生きています。

「樹幹」は、内樹皮は生きていますが、直接目に見える外樹皮は、核やミトコンドリアといった細胞の内容物が消失しています。つまり死んでいます。

樹皮を除く樹幹の細胞のうち、生きて冬を越すのは、細胞分裂を行う薄い形成層と、栄養を蓄えておく機能を持った柔細胞だけです。

柔細胞が生きているのは辺材（白太）だけで、心材（赤身）では他の細胞と同じように死んでいます。生きている樹木であっても、木材として使われる樹幹の大部分は死んでいます。

※内樹皮：白い部分。外樹皮：茶色い部分。形成層は見えません。

※形成層：樹幹の木部と樹皮との間にあって、木部と樹皮を作り出す分裂細胞。

※柔細胞：主としてでんぷん、糖類などの養分の貯蔵、配給を行う細胞。

(日刊木材新聞社発行「今さら人には聞けない木のはなし」より抜粋)

